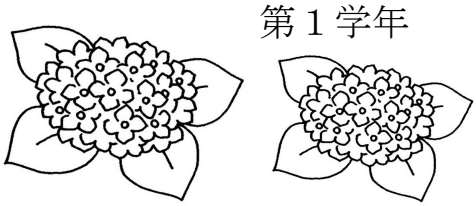
第９号　６月５日
尼崎市立塚口中学校
第１学年



学年通信

近頃よく思うこと

３人の子供たちの中学校生活と共に、９年間続いた「中学生の親」としての立場を今年の３月でやっと終えました。「やれやれ」と思うと同時に、「中学校教師」として自分の子供たちをきちんと「中学生」らしく育て上げることができなかったのではないかと、ふと自戒してしまうこともあります。

中学生としての３年間は、反抗期という難しい時期にあたります。でも、この反抗期を迎えることがきちんした成長をしている証拠であるとも言われています。難しい時期であると同時に本当に大切な時期でもあるのです。

そんな大切な時期を迎えている君達に、どんな指導をするべきか本当に思案中です。「ええことはええ」「あかんことはあかん」と最低でも守るべきことは守らせたい、どうすればうまく人間関係を作っていけるのか、誠実に人に対応することの大切さを実感してもらいたい、人や自分をだますこと・裏切ることは絶対にダメ、そんなことを同じ「人」として伝えていきたいのだけれど・・・。時としてはうまく指導できず、荒っぽい方法になってしまったという反省すべき過去もありました。

そんな時に出会ったのが、詩人・坂村真民の「とげ」という詩でした。「詩」というよりも「教え」に近いものでした。

「とげ」　　**坂村真民**

刺さっていたのは
虫メガネで見ねば
わからないほどの
とげであった
そのとげを見ながら思った
わたしたちはもっともっと
痛いとげを
人の心に刺し込んだりしては
いないだろうかと
こんな小さなとげでも
夜中に目を覚ますほど痛いのに
とれないとげのような言葉を
口走ったりしなかったかと
教師であったわたしは
特にそのことが思われた

言葉というものは、遣い方によっては「愛情」や「勇気の源」になります。でも間違って遣うと「武器」にも「毒」にもなってしまうのですね。互いを高めあうような言葉の遣い方や話し方をしていかないと・・・、そんなことをよく考えるこの頃です。